

## 目が覚める思いのする「計画」の哲学と手法 『メイキング・ベター・プレイス―場所の質を問う』

パッツィ・ヒーラー著、後藤春彦監訳、村上佳代訳

鹿島出版会 (3,800円+税)  
(四六判、366頁、2015.9)

### ●「場所の質」とは？

現代ほど「計画」という名前のついた書類や組織や行政システムがひろがっている時代はないが、陳腐化・矮小化の傾向は否めない。著者のイギリスの女性都市計画研究者パッツィ・ヒーラーによれば、「計画」(planning)とは、場所の質に影響を与える意図的なマネジメントや開発行為のことであるが、彼女はそれを「場所のガバナンス」(place governance)と呼んでいる。計画行為は、空間の物理的状態だけでなく、「人は暮らしを営む場所を気につけ、愛着をもち、手入れを惜しまない」、いわば人々が感じるアイデンティティに強い影響を及ぼす。筆者は開発対象空間を単に「用地」とみなし「器としての空間」を効率的につくるやり方を超えて、「ヒト・モノ・コト」「人間・歴史・自然」の「結び目としての場所」をつくり育むことを「計画的志向を持つ場所のガバナンス」と呼び、本書全体にこのことを多面的に論じている。これからの計画のあり方を考えるキーワードは「場所の質」である。

「場所」を哲学的に論じたメルロ＝ポンティによれば、「人々が親しみ深さを感じる場所とは、私たちの身体が生きて生きることである。」著者が目指す「場所」は、このような意味での「生活世界」である。「場所の質」とは、環境の持続可能性と人間が生きて生きることに関

関することである。そのためには、機能的な分割ではなく全ゆる領域の混ざりあいを創発する包括的視座と、ディテールの多様性と、コトの運び・協議のしなやかさを大切にすること、計画するとはそういうことである。その担い手のプランナー像についても示唆的である。「場所に関するメンタルモデルに向かい、創造性を邪魔するような重い臉をあげろ！」との叱咤激励に、私たちはしっかりと耳を傾けたい。

### ●「計画志向をもつ場所のガバナンス」3つの領域

生活者にとっての暮らしやすさ、自然や地域の持続可能性を実現するための「計画志向をもつ場所のガバナンス」を、本書は3つの領域を通じて、世界の諸都市の実践事例を通して詳論する。1つ目の「近隣住区における日々のマネジメント」では、バンクーバーの近隣住区ガイドラインづくりと神戸市真野地区まちづくりをとりあげ、街区レベルにおける場所のガバナンスに求められる資質を明らかにしている。真野地区50年にわたる住民主導のまちづくりが、場所のマネジメントを地域文脈尊重と諸主体の協働で進めたことによると高く評価されている。真野地区は、小学校区単位で向こう20年先のまちづくり構想をつくり、その実践と監視を地域主導で行い、公害や阪神大震災や暴力団の社会的災害・自然災害・人災等の多様な難難を創造的に乗り越え、歴史・文化・生活を融合した個性ある誇りにたる場所の質を担保してきた。現代世界のまちづくり全体の中で、正当に位置づけられ評価される所以である。

2つ目は「巨大開発プロジェクトの現場」では、バルセロナの水辺空間、バーミンガム市中心市街地等を取りあげ、都市の場所性の発見と

再創造、巨大開発事業の中で自然・歴史を配慮した公共空間の質を高めることや、公的セクターが「起業精神」を持つ重要性を提示している。

3つ目の「場所の開発戦略の場」では、1世紀にわたる場所の開発戦略をアムステルダムに求めるとともに、計画文化を進化させてきたポートランドを取り上げ、特有の歴史とその土地の地理的特性と共鳴するような文脈の発展を目指す場所の戦略的計画づくりと、そのための「協議的ガバナンス」のスタイルの確立が評価されている。

### ●「協議型ガバナンス」の「アリーナ」の成立条件

これからのまちづくりのもうひとつのキーワードは「ガバナンス」である。「ガバナンス」とは、場所のマネジメントや開発を進めるための人々が関わるあらゆる公共的な行為、それを推進するために意図的に設けた共同のルールである。「ガバメントからガバナンスへ」の変化を意味するものではない。ガバナンスの一部としてガバメントがある。

本書ではガバナンスの基本型を「官僚機構型」「目標設定・合理的分析型」「政策提唱型」「起業家的事業型」をあげつつ、21世紀の潮流は「協議型」と方向づけている。「協議型」ガバナンスといえば、わが国は近年小学校区単位のまちづくり協議会という「アリーナ」がひろがりつつあるが、本書で評価を受けた神戸市真野地区は別にして、近年開始された大半はうまく作動していない。うまく進めるためには、市民と行政がガバナンスのあり方を構想・実践するにあたり、計画プロジェクトをたえず公共圏の一部としての公益とは何かを問い、それを地域の人々が共同して取り組むコレクティブ・ア

クション（社会的協働行為）としていかにしうるかを探究することである。

わが国ではこれまで地域ガバナンスは、町内会連合が担ってきたが、21世紀型ガバナンスは、そのような地縁型組織による住民生活の親睦や地域行事の実施や行政等の情報回覧の範囲をはるかに越えて、福祉・防災・教育・文化・まちづくり等の多領域を横断的につなぐ、包括的エリアマネジメントを計画的・合理的に組織する新しいガバナンスを創設することが求められている。その際、古いガバナンスの地縁組織を切って、新しいガバナンスのみを形式的に設置・運営しようとしても既存のガバナンスの抵抗と分断の動きが起こる。大切なことは、新旧ガバナンスのダイナミクスを地域の状況にあわせて配慮し、両者が対立・分裂におちいることなく、共に発展・進化していく道筋を慎重に見つけ創りあげていくための協働学習と協議が、地域住民側にも行政側にも求められる。

本書はそのことをガバナンスの「制度的に設定された場やアリーナ」が「意味を持つように随時翻訳され定義づけられる、固定されることなく異なる行政レベル間や社会領域間を揺れ動く」ことへの熟慮の重要性について言及している。「アリーナ」は円形闘技場のことであるが、現代の「アリーナ」は小学校区という基本単位において、あるべき地域自治のガバナンスの「アリーナ」の設定と実施と監視について、住民と行政が共に提示された問いに対する答えを探しだしていく時代である。本書は、そのことを深く考えぬくことに誠に沢山の知恵を授けてくれる。

目が覚める思いのする本書に、多くの読者が出会いますように。

評者：延藤安弘（NPO法人まちの縁側育くみ隊代表理事）